

復活節第五主日（A年）のみことばの典礼の解説

第1朗読 使徒言行録 6・1-7

弟子たちは聖霊に満ちた人を七人選んだ¹

06:01 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。06:02 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。06:03 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。06:04 わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」06:05 一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンテオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、06:06 使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。06:07 こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

【解説】有名な助祭選任の箇所。「ギリシア語を話すユダヤ人」はディアスポラ出身のユダヤ人¹で、「ヘブライ語を話すユダヤ人」はユダヤ内で生まれ育ったユダヤ人である。両者の間に生まれる不協和音は初代教会がその最初から直面しなければならなかった問題であった。しかし、この状況²から助祭が生まれることに注目すべきである。今日の箇所での衝突の理由は「日々の分配のこと」と言われるが、それはユダヤ教の伝統から教会が受け継いだとされる貧しい人々への援助であったらしい。学者によれば、①「パンかご」と呼ばれる基金で、毎金曜日、それぞれの地域の貧しい人々に与えられた14食分のお金、または、②「盆」と呼ばれる食糧の喜捨から、毎日、貧しい見知らぬ人に届けられた糧であったと想定されている³。初代教会では信者のやもめもそれに与っていたらしく、それは旧約時代から行われていた(出 22:22-24、申 10:18、24:17, 19, 21、ヨブ 31:16、シラ 4:10、35:13, 14 参照)⁴。

助祭を選び出すことになった初代教会がその理由や条件としているのは以下(2-4節)。

- ① 十二使徒が、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない(2節)ので、祈りと御言葉の奉仕に専念するため(4節)。
- ② (助祭に選ばれる人は) “霊”と知恵に満ちた評判の良い七人(3節)
- ③ 助祭の仕事(3節)は、食事の世話(2節)という仕事

¹ ディアスポラ(民族離散)とは(植物の種などの)「撒き散らされたもの」という意味のギリシャ語に由来する言葉で、よくパレスチナ以外の地に移り住んだユダヤ人およびそのコミュニティに使われた。ここではヘレニズム期にパレスチナから移り住んだ多くのユダヤ人たちのことを指す。彼らはヘブライ語ではなく当地の公用語ギリシャ語を使っていた。

² 多くの学者は、単に「日々の分配(食事のこと)」のみで衝突があったのではなく、日々大きくなっていくキリスト教共同体は様々な人種が交わったため、他の多くのことで不和の問題を抱えていたと指摘する。

³ 「新共同訳 新約聖書注解 I」P569 上段左参照

⁴ フランシスコ会「原文校訂による口語訳 使徒言行録」P67 注(2)

この三つに注目したいが、まずは使徒たちが専念しなければならない“①祈りと御言葉の奉仕”について。“祈り”とは典礼上の決まった祈りを指す⁵のか、単にユダヤ教から継承された敬虔な祈りの意で、ルカが使徒たちを祈りの人として提示したかったから⁶なのか、意見は様々であるが、使徒が祈りの人でなければならないというのはどの時代の人を読んでも納得のいく論点であろう。次に「御言葉の奉仕」であるが、ルカはここで“ディアコニア (διακονία)”というギリシャ語を用いる。この“奉仕”の意味が当然、食卓の奉仕のみならず、貧しい人の世話を含む幅広い意味での奉仕となり、そして、共同体の経済面の仕事に携わることも含まれるようになったことは理解に難くない。

次に、「③助祭の仕事 (3 節) は、食事の世話という仕事」について。まず“仕事”と訳されている言葉は原語では“クレイヤ (χρεία)”というギリシャ語で、もともと必要や必要性を意味し、そこから務め、役割、役目、監督などを意味するようになった語である。初代教会の組織的な部分が形成され、発展していったのがわかる。とは言っても、それは“食事の世話 (2 節)”であるとルカは明言しており⁷、助祭職の起源は、やはり食事の席での奉仕だったのであろう。それでも、後の使徒言行録に描かれているステファノの霊と知恵に満ちた言葉や英雄的に殉教する姿、または、フィリポの異邦人を改宗させ力強く宣教する姿などは食卓の奉仕者というイメージをはるかに超えているのは注目に値する。もちろん、彼らは「②“霊”と知恵に満ちた評判の良い七人 (3 節)」であった。選任の際の「選ぶ」という動詞には 70 人訳聖書の民数記 28:15-20 節⁸に描かれている「ヌンの子ヨシュア (モーセの後継者) の選出」の箇所が下地になっており、文学的構成にも共通点が見られる。また、「霊と知恵に満ちた」という表現は「信仰と聖霊に満ちた (5 節)」や「恵みと力に満ちた (8 節)」と同義語でルカがよく使う表現である。なぜ七人なのかについては諸説ある。“7”という数字が聖書における完全数であること (例:「七日間による天地創造 (創 1 章)」、「ナアマンが 7 回ヨルダン川につきり清められた (列王下 5:9~)」、「七の七〇倍まで罪をゆるす (マタ 18:21~)」等)、または、ユダヤ教社会にあった「町の七人委員会」と呼ばれたものとの関係も指摘されている。

第 2 朗読 一ペトロ 2・4-9

あなたがたは選ばれた民、王の系統を引く祭司である

02:04 この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、

⁵ フランシスコ会「原文校訂による口語訳 使徒言行録」P67 注 (5)

⁶ 「新共同訳 新約聖書注解 I」P569 下段左参照

⁷ 原語はディアコネイン (διακονεῖν) = (食卓に) 奉仕する、給仕する、仕える)。

⁸ (民数記/27 章 15-20 節) モーセは主に言った。「主よ、すべての肉なるものに霊を与えられる神よ、どうかこの共同体を指揮する人を任命し、彼らを率いて出陣し、彼らを率いて凱旋し、進ませ、また連れ戻す者とし、主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください。」主はモーセに言われた。「霊に満たされた人、ヌンの子ヨシュアを選んで、手を彼の上に置き、祭司エルアザルと共同体全体の前に立たせて、彼らの見ている前で職に任じなさい。あなたの権威を彼に分け与え、イスラエルの人々の共同体全体を彼に従わせなさい。」

生きた石なのです。02:05 あなたが自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。02:06 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」02:07 従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、02:08 また、「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。02:09 しかしあなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

【解説】先週に引き続き、ペトロの手紙Ⅰからの朗読。今日の箇所でも異邦人から改宗したキリスト者にどのような生き方をすべきかが説かれている。この箇所が頻繁に述べる「石」の理解のためには、詩編 118 編 22 とイザヤ書 28 章 16 節の前提が必要である。詩編 118 の「石」とはイスラエルを差す。イザヤ書 28 章の「隅の石」は、アッシリアの侵略におびえてエジプトと同盟を結ぼうとしていたエルサレムの指導者たちに対し、神への信頼を訴えた預言の中に出てくる言葉である。後期ユダヤ教においては両者ともメシア的に解釈されており、初代教会はそれをイエスとみなした。旧約と合わせてキリストの死と復活を解釈した初代教会のキリスト論的表現である。「霊的な家」という呼称は、旧約においてイスラエル共同体を意味した「神の家」から来ているものの、人間の手によってつくられた物質的な(ユダヤ教の)神殿との対比があり、ここでは、洗礼を受け、キリストと結合されて真の神の神殿を築くキリスト者共同体を意味する。

5 節の「祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい」という勧告には、洗礼を受けたキリスト者の使命がはっきりと示されている。まず、「祭司」と訳されているヒエラテウマ(ἱεράτευμα)というギリシャ語は、新約聖書中、この 5 節と 9 節だけに出てくる言葉で、集合名詞として用いられており、祭司集団を意味する。キリスト者全体は祭司集団であり、教会は神に仕える祭司集団であると言う。ところで、旧約における祭司とは主に典礼の場で祭儀を司り、人々のために代わって礼拝と供え物を捧げた神と人との仲介者のことである。洗礼を受けたキリスト者は皆、祭司として神と人をつなぐ使命を持っているということである。この文脈では、キリスト者の祭司としての使命はその言葉通り、旧約の祭司の典礼的要素や側面があるが、キリスト者が捧げるよう命じられている「霊的ないけにえ」とは旧約の物的いけにえとは異なり、感謝と賛美、清さと畏敬と兄弟愛の生活、また打ち砕かれた心など、すなわち、全人格と生活全体における自己奉獻を意味する。初代教会の初めからこのように信徒の使命が述べられていたことは再認識する必要がある。なぜなら、第二バチカン公会議の特に「教会憲章(35 項～)」や「信徒使徒職に関する教令」、または聖ヨハネ・パウロ二世教皇の使徒的勧告「信徒の召命と使命」などの最近の公文書で再三言及されているからである。ミサ聖祭を信徒の共通祭司職を持って捧げること(信徒の積極的参加)や、

特に日常生活を通して、日々の働きにおいて世界の隅々にまで神の国をもたらす使命があることは現代のキリスト者皆が再考察すべき課題である。

福音朗読 ヨハネ 14:1-12

わたしは道であり、真理であり、命である

14:01 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。14:02 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。14:03 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとの迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。14:04 わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」14:05 トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」14:06 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。14:07 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」14:08 フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、14:09 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。14:10 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。14:11 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。14:12 はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。

【解説】 ヨハネ福音書 13-17 章には、弟子たちとの最後の食事の席におけるイエスの言動が描かれている。全二十一章中、五つの章(約 1/4)をこれに割くヨハネは当然、ここでのイエスの行為、特に言葉を遺言的に描き、その重要性を強調する。13 章の弟子たちの足を洗うという模範に始まり、“互いに愛し合え”という新しい掟を与えた後、イエスは自分が去っていくことを明言する。続く 14 章はイエス不在におびえる弟子たちを安心させようとするイエスの言葉で始まる。**【1-2 節】**心を騒がせず、神とイエスを信じるように招くイエスは、弟子たちのための住む所、場所について話す(2 節)。住む所と訳されている原語ギリシャ語は **μονή** (モネ) と言い、ヨハネ福音書が好んで用いる **μένω** (メノ=居続ける、留まる、繋がる⇒一体である) という動詞から派生している名詞で、新約聖書中、ヨハネ 14 章 2 節と 23 節のみに見られる。イエスは弟子たち(ヨハネ福音書の読者のキリスト信者を含む)のために一緒に住む場所を用意しておく約束しているが、それは神である父と子が一つであるというその一体性の中に、弟子たちをはじめとするすべてのキリスト者を招き入れる約束と言ってもよい。ヨハネ福音書における救われた概念は、父と子の一体性の中に入り、そこに留まること、その一体性のう

ちに自分が繋がっている状態である。【3節】「戻ってきてあなた方を迎える」とは、まさに復活後、イエスが救いを完成し、父なる神とご自身の一体性の中に招き入れる救いの約束である。【5-8節】今日の福音では二人の使徒、トマスとフィリポがイエスと対話をしているが、ヨハネ福音書の特徴でもある“愚かな対話者”の役割をする。3章のニコデモ、4章のサマリアの女性、6章のユダヤ人たちなどに代表されるイエスの対話者は、この世のことや、人間の知性と理性に基づいて話をするが、それに対し、イエスは霊的真理を語る。当然、両者の対話がかみ合わないが、それこそがヨハネの福音書の特徴の一つである。順番としては一般的に、何らかの出来事や奇跡がはじめにあり、それに基づくイエスと愚かな話し手の対話が展開され、最後は決定的な霊的事実を物語るイエスのモノローグで占められるパターンが多い。例えば、トマスの「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか」とは、人間の側からはもっともな質問であるが、それに対しイエスは霊的真理を宣言する。【6節】「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」。これは、先週の日曜日に読まれた福音の箇所（ヨハネ 10 章）の「わたしは羊の門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける」に通じている。先週の解説でも述べたが、“イエスが門であること”と“イエスが道であること”はヨハネの救済論にとって重要で、イエスという門を通して入る者、イエスという道を通して行く者は救われるという主張である。イエスに従って生きる時、その生き方は必ず我々を救いに導くというヨハネの論点である。【7節】「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている」。ヨハネ福音書は「知る」という動詞を多用するが、それは単に情報を得て知識を増やす行為ではなく、知る者とその対象(者)の深い一致という深い意味を含んでいる。これは聖書に出てくるすべての「知る」(旧約ではヘブライ語、新約ではギリシャ語双方とも)が持っているニュアンスで(例「アダムは妻エバを知った(創4:1)」)、イエスを知るとは、イエスと一つとなることである。そしてイエスが父を誰よりも知る者であるから、つまり、イエスと父とは一体であるから、イエスを知りイエスと一つである者は父なる神とも一つであるということになる。これもまた、先ほどの救われた状態と同様である。【8節】ここでフィリポが愚かな対話者の役を演じ「御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言う。これまた人間である私たちにとってはもっともな願いのようだが、ヨハネはこれを、先ほど説明したことを再確認するために用いていると言ってもよい。父とイエスとは一つなのだから、イエスのうちに父がいるし、またその反対もしかりである。【9-10節】イエスはフィリポを叱責する形で答えるが、さらに説明を加える。イエスが話すこと、そして行うことはすべて父の業であると断言する。それほどまでにイエスと父なる神との一体性は強力なのである。【11節】「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを信じられないなら、業そのものによって信じなさい」というイエスの説

明も、最後はかなり人間の理性に訴える形になったと言ってもいいかもしれない。【12節】「はっきり言うておく⁹。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。」このイエスの最後のことばはやや難解である。イエスを信じる者がイエスと同じ業を行うことはまだ理論的には理解可能だが、もっと大きな業が何を指すかについては様々な解釈がある。代表的なものとしては聖霊降臨後の弟子たち(キリスト者たち)の宣教の業全般を指すというのがある。奇跡や人から賞賛を受けるような教えなどの具体的業を指すよりも、聖霊に満たされたキリスト者たちが、厳しい迫害の中にあっても力強く神のことばを宣言していることこそ、聖霊の働きによるものだ¹⁰と確信していた初期キリスト者たち、特に聖霊降臨後の教会共同体であるヨハネ共同体¹⁰の視点がここにある。

最後に、今日の箇所には「信じる」という言葉が六回も出てくる。この言葉を解説するには紙面が足りないが、一言でいうと“信頼”というニュアンスが大切である。自分に頼れるものが何もなくなった時、自分の存在を安心して委ねられる存在がいるなら、聖書的には、その存在を「信じている」と言えるのである。「UFOや宇宙人がいるのを信じる」、「明日晴れだと信じる」という日本語のニュアンスは全くない。聖書のギリシャ語では、考えて判断した結果としての自分の考えを「信じる」という言葉では表さず、その場合は別の動詞を用いる。なお、ヨハネ福音書が書かれた目的は読者が「信じる」ようになるためである¹¹。だからヨハネ福音書のイエスは信じるように絶えず招く。実際、この福音書には100回ほど「信じる」という動詞が使われている。今日の福音でも中心的メッセージになっている「信じなさい」という言葉は、イエスの招き、勧告であると同時に、私たちにとっては救いの業、つまり、イエスと一体、故に父なる神と一体になるための手段である。このようにヨハネ福音書においては、イエスを知ることとイエスを信じることは、厳密には同義語ではないが同義的に使われることがあり、信じること(つまり、イエスを父から遣わされた神の子・救い主として受け入れること)によってイエスと父との一体性の中に繋がれるのであり、そこで私たちは救いを体験するのである。それは、必ずしも死後の世界で、もしくは終末の時にのみ完成する救いではなく、今ここで、私がイエスを救い主だと信じ受け入れることで完成する“救いの現在化”なのである(ヨハネ福音書の特徴の一つ)。わかりやすく言えば、「イエスが救い主であること」、そしてその「イエスが共にある(いてくださる)」ことを今、信じることで私たちが救われているというヨハネの主張なのである。

⁹ これは大事なことをいう時に用いられる定型句である。直訳は「アーメン、アーメン、私は(あなた方に)言う」。

¹⁰ ヨハネ福音書の成立は90~100年ごろとされており、ヨハネ福音書の読者たちは、イエスが実際に生きた時からすると、かなり後を生きているキリスト者たちになる。彼らはイエスが復活後に与えた聖霊の働きを非常に重視しており、「大きな業」を聖霊の働きによるものと捉えていた。

¹¹ ヨハネ20章31節「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」。